

(8) 北海道と春まき小麦－「農林29号」が根幹品種－

私が小麦の育種に携わることになった昭和22年頃は、小麦の作付面積が2.6万haで、「農林29号」の作付率が32%を占め、秋まき小麦「赤錆不知1号」の25%を上回っていました。「農林29号」は、「早生小麦」×「農林3号」の組み合わせから育成され、昭和13年に登録されました。昭和19年には、最大作付面積が1万haを僅かに超え、秋まき小麦「ホクエイ」が、春まき小麦に置き換わる昭和34年頃まで、強稈、多収品種として生産者の信頼に添えてきた戦中、戦後に重要な役割を果たした品種です。

また、昭和22年1月に、木原 均著「小麦の祖先」が、さらに7月にヴァヴィロフの著書を邦訳した「小麦育種の科学的基礎」が出版されました。これらの著書は、私の研究意欲を駆り立てたばかりでなく、戦前の知識と技術の水準を知る上で、大いに参考となりました。当時、保存されていた品種の中には、栽培小麦の祖先種である一粒系、二粒系の栽培種と野生種、世界各地の在来種や、戦前に育成された欧米諸国の著名な品種が含まれており、今にして思えば、それは優れた遺伝資源でありました。

保存品種の調査は、育種家としてのトレーニングに役だったばかりでなく、小麦に対する興味や、作物の遺伝的変異に対する関心を深める契機になったように思います。

次に対象品種「農林29号」と硬質小麦「農林75号」の生育特性を知る目的で、出芽から成熟期に至る間、一週間ごとにサンプルをとり、葉、茎、穂などに分けて乾燥し、乾物重を計りました。このようにして、小麦の時間の推移に伴う生長の様子を知り、幼穂の形成や発育の過程についても、体得する事ができました。なお、「農林75号」は、昭和18年に登録され、農林番号が即品種名となった最後の品種であります。ちなみに、次に登録された品種は、「ユウヤケコムギ」(農林76号)と命名されました。

その頃、赤錆病が広く蔓延しており、黒錆病や黄錆病も時折発生しました。黒錆病の発生が著しかった昭和23年は、伊達町(現在伊達市)に出張して、黒錆病により収穫皆無に近い被害を受けた畑を調査しましたが、その時受けた衝撃は未だに忘れられません。

赤銹病抵抗性品種の育成を目指して、アメリカ合衆国から戦後初めて導入された「マイダ×パイロット」と「農林29号」を交配しました。その後代から、昭和33年に赤銹病に強い「キタミハルコムギ」が育成されました。なお、昭和40年に登録され、パン用として人気のあった硬質小麦の「ハルヒカリ」は、「マイダ×パイロット」と「農林75号」の組み合わせに由来します。

次に記憶に残っているのは、製粉試験です。使用した大型の製粉機は、多量のサンプルが必要な上、1日に処理できる点数は極めて少なかったですが、順調に稼働して製粉歩合などの調査に役立ちました。その粉から麩質（グルテン）を取り出してオープンで焼き、膨らみの大きさや形を観察してみたところ、硬質小麦の春まき小麦「農林35号」(昭和13年登録)と、秋まき小麦「農林8号」(昭和8年登録)が最もすぐれており、いわゆる硬質小麦の特性を実感する事ができました。

生産力の検定には、試験区を任意に配列し、反復（繰り返し）回数を従来の慣行に比べて多くした、実験計画法を取り入れて見ました。小試験区専用の脱穀機などがなく、試験区数が多いなど心配もありましたが、無事に収量評価をすることができました。短期間ではありましたが、小麦の育種事業に従事して得られた幅広い経験は、その後の研究の原点になったように思います。

ところで「農林29号」は、本道の春まき小麦の定着と、生産の安定に役立ったばかりでなく、本州の暖地でうどんこ病抵抗性因子の給源になっています。つまり、「農林61号」×「農林29号」に由来する「ウシオコムギ」を経て、「フクホコムギ」などに、うどんこ病抵抗性因子が取り込まれています。なお、「農林29号」のうどんこ病抵抗性因子は、その花粉親「農林3号」に由来します。さらに「農林3号」は、「札幌春小麦」×「ベロツルカ」の組み合わせから育成されており、その際、二粒系小麦の「ベロツルカ」から、赤銹病抵抗性因子とともに、うどんこ病に対する抵抗性因子をも取り込んでいたわけです。

小麦育種の黎明期に、種間雑種の利用という、先進的な技術に挑戦された育種家に、心から敬意を表したいと思います。近年、小麦の生産は、穂発芽

という難題に直面しています。小麦作の安定のために、育種と栽培技術が、今後一層進展するよう願っている次第です。

<後藤 寛治>